

# Two Quaint Bronze Vessels of Ancient Chu State Conserved in the Xiangfan Museum, Hubei Province, China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 満 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24303">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24303</a>

# 襄樊博物館所蔵楚国青銅器珍品二件

## —— 楚文化淵源探索の新資料 ——

谷口 満

### はじめに—新建襄樊博物館を訪問して—

襄樊を訪問するたびに、いつもそう思うのであるが、市街の風情に何かしら上品な趣きがある。すさまじいばかりの建設ラッシュで往事の街並みが急激になくなりつつあるのは、他の都市と同様であるにもかかわらず、襄樊には古くからのゆかしさがより強くとどめられているように思われて、それが一種独特の上品さとして感じられるのである。その一種独特の上品さは何に由来しているのだろうか。

襄樊といえば、周知のように重要な戦役の舞台となった水陸の要衝であり、中国史上屈指の兵家必争の地である。北は漢水に面し、南・東・西の三面を深く広い護城河に守られた旧襄陽城こそは、その中心となった要塞に他ならず、今も残る重厚な城壁は歴代の激戦をしのばせるに十分な雰囲気をかもしだしている。

ところが城内を散策していくと、そのような即物的な激戦のよすがよりも、むしろ洗練された奥ゆかしさがなぜか強くただよってくるのであり、そのことは城内東南角にある仲宣楼に足

をのばせばはっきりする。この楼閣は、建安七子の一人にあげられる王粲、字は仲宣が、ここ襄陽に十五年あまり居住していたことにちなんで建てられたものである。初建の時代は定かではなく、再建された回数も定かではないが、ともかく今立っている王粲像と小さな楼閣は 1993 年に新設されたものであるという。確かに真新しいコンクリートの無機質さは隠しようがないものの、何せ七子のうちでもっとも文才に優れていたという王粲の像なのであるから、見上げればやはりそこに、そこはかたなくただよう優雅さを感じないではいられないのである。

この仲宣楼の例を持ち出すまでもなく、ここ襄樊は、兵家必争の地であるとともに、多くの文人墨客が行き交った、人文萃会の地でもあった。臥龍諸葛亮に鳳雛龐統、唐の詩人孟浩然・張継・皮日休、数え上げればきりがない。中国の思想史や文学史などにおける重要な城市として、襄陽の名はやはり屈指のものであるはずである。兵家必争の地でありながら、人文萃会の地でもあったというこの歴史的事情が、現在の

襄樊に一種独特な上品さを与えていることは、まずまちがないであろう。

その人文萃会の歴史をもっとも象徴的にしめしている建造物といえば、それは昭明台であるにちがいない。昭明とはいうまでもなく、文選の編纂者、南朝梁の昭明太子蕭統のことであり、彼の生地は周知のように襄陽に他ならないのである。当初の文選楼、唐代の山南東道楼、明代の鍾鼓楼・鎮南楼、清朝順治年間修建以降の昭明台という名称の変遷をへてきているとのことであるが、名称の変更にかかわりなく、昭明太子というこの中国文学史上の重要人物を記念することはいうまでもない。現在の昭明台は戦火で破壊されたものを1993年に復元したものであり、旧襄陽城内北街の南より、北街に西から積倉街、東から鼓楼街がぶつかる場所に位置している。昭明台からまっすぐ北へ進んで、旧襄陽城北城壁に至るおよそ九百メートルの街路は、歴史的建造物に倣って復元された北街古街となっており、いわゆる歩行者天国の両側に商店が建ち並ぶ、市民の憩いとショッピングの場所である。つまり、昭明台は北街古街の南大門なのであり、アーチ型の台門をくぐって古街にはいり、書画骨董商店・茶店に立ち寄りながらゆっくりと散策し、北城壁の城門を抜けると、漢江南岸の船着場小北門碼頭に行きあたる。川幅はおよそ一キロメートルであろうか、目をこらせば対岸真正面に北宋の文人米芾を祀った米公祠を望むことができるであろう。一時間あまりのこの北街散策は、さながら昭明太子にいざなわれて茶をすすりながら書画・骨董の名品を觀賞し、太子の指さす方向に米公芾の祠堂を望むの感があり、人文の城市襄陽のかつてのあり

ようを堪能することができるのである。

その昭明台を館舎として襄樊博物館が開館したという消息に接したのは一年半ほど前のことである。数年前襄樊考古隊長陳千万先生にお会いした際、先生は、襄樊に博物館がないというのはあまりにもおかしい、襄樊博物館の建設は襄樊市民の熱望するところであり、それに比べてほどなく建設されることになっていると力説されたが、その時はそれが昭明台を利用してのものだとは、お話しされなかったように思う。いったい昭明台をどのように改造して、展示施設や保管施設を設置したのであろうか。どうしても行ってみたいくなるのは人情というものであるが、意外に早く、2010年9月にその希望がかなえられることとなった。

館長王先福先生に案内されて台門東側の博物館入り口を入ると、まず襄樊の歴史を彩った有名なレリーフを時代順に並べた“名人牆”が目にとびこんでくる。政治家や軍人もいるが、やはり思想や文学で名をなした者が多いようであり、襄樊の風情に対する自分の感じ方がまちがってはいないことが証明されたようで、何だかうれしさを抑えることができない。展示室は二層に及んでおり、第一単元：史前时期的襄樊、第二単元：先秦时期的襄樊、第三単元：秦漢时期的襄樊、第四単元：三国兩晉南北朝时期的襄樊、第五単元：隋唐至明清时期的襄樊の五コーナーに分かれて配置されている。いずれのコーナーも見応えのある展示品ばかりであるが、量的に言えば、第二単元：先秦文物の展示が全体の半分以上に及んでいることはまちがいでなく、そしてそのなかでも、楚国の文物がその大宗をなしている。展示品の中心となっている青銅器・玉器は、いずれも楚文化の精髓ともい

うべき精品であり、これらの逸品を目の当たりにすれば、誰もが襄樊地区楚文化の高度さ華麗さに思いをいたすことになろう。

襄樊地区は楚国の歴史と文化における、一つの重要な展開地区であった。それは、襄樊のもつ政治的・経済的地勢から当然想定されるところなのであるが、ただ、展開した楚文化の様相となると、楚国の近畿地域である江陵地区などに比べて、従来はやや注目度が低かったことは否めない。理由はさまざまであろうが、出土する楚文化文物があまり豊富でなかったことが、その一つの大きな理由であろう。

しかし、近年の出土は質・量ともにまことにめざましい。二度目の襄樊訪問の際であったと思うが、文物の保存と修復の基地の一つとして使用されている、緑影壁巷の旧襄王府に案内されて驚いたことがある。屋内はもちろん屋外の庭園にも、足の立て場がないほどに無数の陶片がところせましと並べられ、修復・保存・整理をまっているのであるが、作業に従事する専門家はわずか数名ほどで、これでは正式の報告が全部出そろうまでにいったいどれほどの時間がかかるのか見当もつかない有様である。陳千万先生に聞くと、その大半は襄樊地区の楚墓から出土した倣陶陶礼器と日用陶器であるとのことであり、それは楚式の鼎・敦・壺や連襜鬲の完器が数十件がそろっていることからもしっかりとわかる。そして先生は、この旧襄王府の他に、従来からの保存・研究施設である荆州街の旧文物勘探辦公室や南街陳侯巷の工作站に、陶器・青銅器・玉器・漆器などの楚文化文物が大量に保管されており、しかも楚墓の発掘が次々と予定されているのであるから、いつのことになるかは不明であるものの、襄樊が楚史楚文化研究

の資料センターになることはまちがいないと断定されるのをお忘れにならなかった。完器が並べられた整理棚のまわりに、修復をまつ陶片が無数に散らばる状況をみるにつけても、千万先生の断定が十分根拠のあるものと納得させられたのである。

襄樊博物館に展示されている楚文化文物は、精品ではあるけれども、出土した文物のうちのほんの一部にすぎないことを、この点、注意して確認しておかねばならない。湖北省博物館、荊州地区博物館、それに浙川県博物館と河南省博物院、そして今、楚史楚文化研究者が必ず訪問しなければならない博物館の一つに襄樊博物館が加わったわけであるが、それは、ただ単に精品を自由に参観しうる設備が新設されたことだけを意味するのではなく、背後に存在する膨大な資料群によって、襄樊が楚史楚文化研究の一つの中心になったことをも意味しているのである。

楚史楚文化研究の将来にこのように思いをはせ、一時間あまりの参観を終えて外にでてみると、昭明台が静かにたたずんでいる。博物館の施設は台基内部の東側をくり抜いて造られており、台の外からはまったく見えない。もし襄樊博物館という扁額が台門の上に掲げられていなければ、内部に博物館があるとは誰も気づかないであろう。王先福先生によると、今回の開設は一時的な措置であり、いずれは郊外のしかるべき専用の敷地に新設することになっているのだという。昭明台の内部を利用するという今のユニークなあり方も捨てがたいものがあるが、やはり専用の敷地に移転することがベストであることは当然である。いずれ開設されるその博物館もぜひ参観したいものである。

徒歩で南街陳侯巷の workstation に向かい、そこで三国時代墓出土の青銅馬をはじめとする修復・整理中の出土文物を見せていただいたのち、わずか三時間の襄樊滞在を終えて、夜の道を一路鄖県に向かうことになった。千万先生や先福先生は、なぜ一泊しないのかといぶかるが、予定の都合上いたしかたない。また必ずまいりますと別れを告げて車に乗り込んだのは七時半であったが、おりしも旧襄陽城の城壁にしつらえられたイルミネーションが灯ったばかりで、量的・色彩的には豪華とはいえないものの、かしなるともいえないおちついた風情のある美しさであった。

車中、頂戴した二つの書冊を開いてみた。一つは襄樊市文物考古研究所編『襄樊考古十年1996~2006』（湖北長江出版集団・湖北美術出版社）であり、上編：考古新発見・下編：考古十年記・附表一：襄樊市十年考古発掘情況一覧表・附表二：襄樊市十年考古科研成果一覧表からなり、現在のところもっともまとまった襄樊考古学のハンドブックである。陳千万先生と王道文先生の筆になる考古十年記には、いかに困難な状況のもとで考古工作が進められたかが記されており、叙述がたんたんとしているだけに、余計に辛苦がしのばれ、各先生の努力に敬意を表さずにはいられない。今一つは『襄樊博物館文物陳列』（湖北長江出版集団・湖北美術出版社）であり、新建博物館の図録である。第一単元：史前時期から第五単元：隋唐至明新時期にいたる代表的な展示品と収蔵品がすべてカラーで収められており、その彩りの美しさをながめるだけでも楽しいものがある。

図録のなかでは、やはり楚国文物が分量的に第一位をしめているが、そのなかに二件、きわ

めて珍奇な青銅器が採録されている。「戦国措銀馬佩飾」(55頁)と「戦国措金嵌玉髓形銅帶鈎」(40頁)で、前者ははじめて目にするものであり、後者も何かの機会に目にした記憶があるものの、このような鮮明な写真を見るのははじめてのものである。両者にみられる動物のモチーフが、楚文化の背景を考えるうえできわめて重要な資料であることは、楚文化器物を見慣れた者にとっては容易に判断されるはずであるし、それに、この珍品の写真をみて一人で喜んでるのは、同好の士に何か申し訳ないような気がしてきて、一文を草して二件を紹介しようという気持ちにわかにわきあがってきた。もちろん、襄樊地区出土楚文化文物の全容公表がまだまだ先のことである現段階で、二件の資料価値を云々するのは少し危険であるのかも知れないが、しかし、案ずることはない、訂正すべき事態が生ずれば訂正するまでのことではないか。そのような想いを乗せながら、車は夜の漢十高速道路を走り続け、鄖県に到着したのは夜の九時半であった。

帰国後、その際の想いを実現すべく、関連資料を導入して執筆したのが小稿である。執筆を思い立ったのはもとより自分であるが、今回の調査旅行における、陳千万先生・王先福先生及び全行程を陪同して下さった劉国勝先生（武漢大学）のご配慮とご教示がなければ、その意欲はそもそも生じなかつたにちがいない。三先生のご好意に、あらかじめあつく御礼申し上げたいと思う。

## 戦国措銀馬佩飾

襄樊地区楚墓の発掘は、七十年代前半の山湾

楚墓と蔡坡楚墓のそれからはじまったといっ  
 よいであろう。蔡坡発掘報告の末尾で執筆者の  
 楊権喜氏がいみじくもいっているように、襄樊  
 地区の楚墓はそれまでほとんど“空白”の情  
 況にあったのであるから、両地あわせて三十数基  
 の楚墓の発現は、量的にいうだけでもまったく  
 新たな資料状況の出現を意味したはずである  
 し、しかも、それらの楚墓からは、その後の襄  
 樊地区楚墓から出土することになる楚文化器物  
 の基本的な組み合わせが、ほとんどすべて出  
 揃って出土しているのであって、質的にいって  
 も、まさしく襄樊地区楚文化研究の出発点と  
 なった発現といえることができる。すなわち青銅  
 礼器・青銅兵器・倣銅陶礼器・日用陶器・玉器  
 など、楚墓に常見する楚式のそれらが大量に出  
 土しており、漆器も量的にはごく少数であるも  
 のの楚文化に特有の鹿角器をいくつか見ること  
 ができるなど、どこからみてもまごうことなき  
 典型的な楚文化の様相を呈しているのである。

ところで楚文化の器物といえば、いわゆる青  
 銅車馬器も特長あるものとしてこれらに加えね  
 ばならないであろう。器形といい紋飾といい、  
 楚文化の車馬器は他文化にはない特色をもっ  
 ていると思われるからである。山湾においても蔡  
 坡においても、車書をはじめとして数多くの楚  
 系青銅車馬器が出土しているが、なかには図の  
 ようなきわめて奇形状をしたものもある  
 (図1)。蔡坡四号墓からの出土で、報告では“方  
 座套環”と命名されていて、環部に何かをはめ  
 て使用する可動式の接合金具であることはまち  
 がいない。奇特というのは、長方形の“框座”(台  
 座)の両側に乗っている柱架の形状であって、  
 報告者は1・2・3についてはこれを象鼻・象頭・  
 象首、4についてはこれを龍身であるとみなし

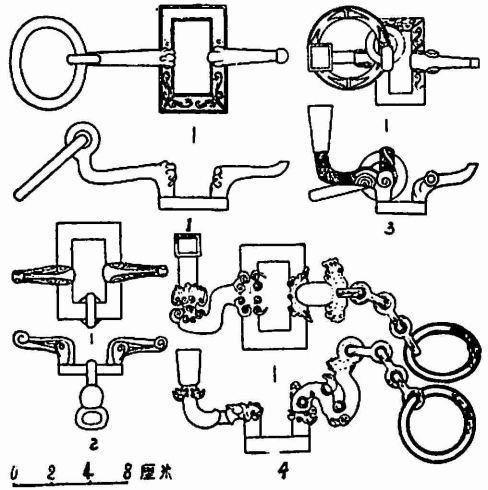


図1 湖北省博物館「襄陽蔡坡戦国墓発掘報告」  
 (『江漢考古』1985-1)。

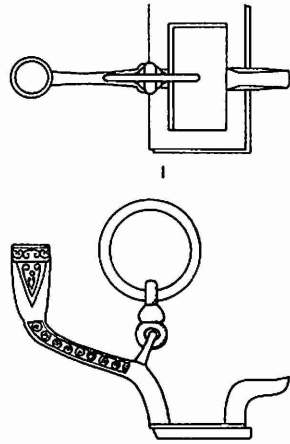


図2 湖北省宜昌地区博物館・北京大学考古系「当  
 陽趙家湖楚墓」141頁(文物出版社・1992  
 年)。

ている。1・2・3のそれらを象形とみることに  
 ついては、おそらく異論もあろうが、ともかく  
 なにかの獣形であることはまちがいない、こう  
 いった奇形状が実用器である車馬接合器に  
 設定されているのであるから、やはり特異な現  
 象といえよう。

ちなみに獣形モチーフをもったこのような可  
 動式接合金具は、高至喜主編『楚文物図展』  
 (2000年・湖北教育出版社)を開くと、その後

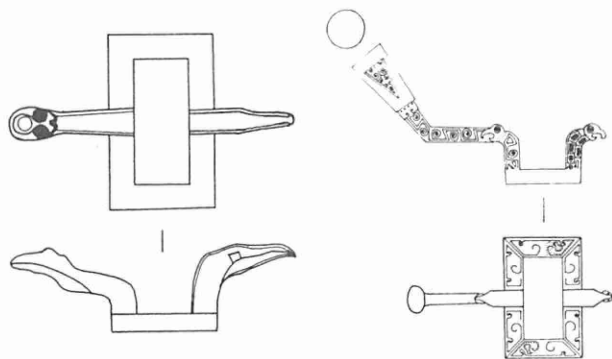


図3 高至喜主編『楚文物図典』171頁（湖北教育出版社・2000年）。



図4 湖北省荆沙铁路考古隊『包山楚墓』241頁(文物出版社・1991年)。

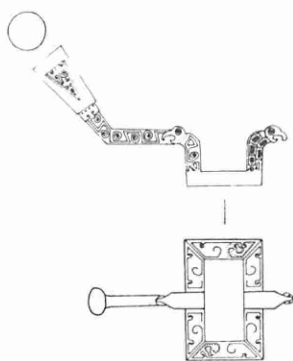


図5 湖北省荊州地区博物館「江陵天星觀一號楚墓」(『考古學報』1982-1)。

形などは鳥頭と見るのがどうみても自然なように思うが、そうと断定する決め手はなく、残念ながら今のところは不明としておかねばならない。

ともあれこのようにして『楚文物図展』を開き進めていくと、最大級の戦国楚墓といわれる江陵天星観1号墓からは、さらに奇特な形態をもった可動式接合金具が出土していることに気づくことになる。『図典』では“措紅銅雲紋銅扣飾”，天星観1号墓の報告では“銅活頁卡環”と命名されているもので、図のような形態もっている（図5）。一見して明らかなように、框座が二つあるのを除いて、基本的な仕組みは蔡坡や金家山や六安城西や包山のものと同じであるものの、二つの框座をつなぐ金具が臥虎の形をとっている点において、他にはない奇特さ

各地のいくつかの楚墓から出土していることが知られる。当陽金家山45墓（図2）・安徽六安城西2号墓と16号墓（図3）・荊門包山2号墓（図4）などからの出土例がそれであり、基本的な仕組みはいずれも蔡坡出土のものと同じであり、同じ用途に用いられたものであることがわかる。ただ、報告者が象形と見なしている蔡坡出土例の当該部分は、金家山・六安城西・包山ではすべて鳥頭形となっており、蔡坡出土例のそれを象形とみてそもそもよいのかどうか、ここから異論が生じるのである。蔡坡2の側視

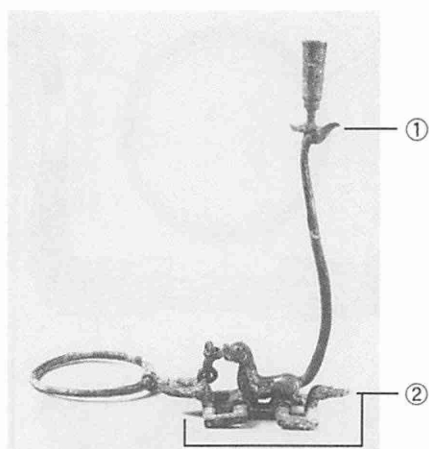


図6 張靖主編『襄樊博物館文物陳列』55頁（湖北美術出版社・2010年）。

をほこっているのである。楚文化器物の虎モチーフといえば、虎尾鳥架鼓や虎座飛鳥などの漆木器あるいは刺繍絹の図柄に見えるものがほとんどであり、とすれば青銅器、それも車馬器に見えているということ自体だけでも、注目にあたいする器種であるといわねばならない。

蔡坡以来の楚墓出土青銅製可動式接合金具を以上のように列挙した上で、さて、紹介しようとする襄樊博物館所蔵の戦国措銀馬佩飾とは図のようなものである（図6）。王先福先生の指教によると、襄城区の漢水東側対岸、東津鎮陳坡10号墓からの出土であるという。『襄樊考古十年』の「附表一：襄樊市十年考古発掘情況一覽表」には、陳坡墓地で戦国・漢墓10基、六朝・隋唐墓23基を発掘したとあるから、10号墓はそのうちの戦国墓、つまり楚墓ということになる。ただしこの楚墓の発掘報告はまだ未公表であり、詳細は公表をまたねばならない。

その馬佩飾をよくみると、仕組み自体は天星観のものと同じであるが、ただ一点だけ大きく違う場所がある。それは虎尾の頭端下部が鳥頭の形状をとっていることである（①）。

虎尾にして、またそれが鳥首でもあるという設定は、目下のところ類例を見いだせないものであり、まことに珍奇な意匠の組み合わせといえよう。

鳥といい龍といい虎といい、あるいは象といい、青銅器や漆器などに施された動物意匠は、単なる装飾ではなく、一種の動物信仰の表象であると考えるのが常識というものであろう。では襄樊博物館が所蔵するこの珍品にみえる鳥と虎は、楚国における動物崇拝のどのようなありさまを示しているのであろうか。それを考えてみたいというのが、実は紹介を試みている第一の大きな理由なのである。

もっともこの場合、臥虎と虎尾頭端の鳥頭のほかに、他の可動式接合金具と同様に框座にも鳥頭が施されていて（②）、鳥崇拝を示すであろう意匠がもう一組あることに、あらかじめ注意しておかねばならない。一組の鳥頭があれば、それで十分鳥崇拝が表示できるはずであるのに、わざわざ二組が設定されているというのは、どういうことなのであろうか。他の可動式接合金具やこの馬佩飾の框座部分の鳥頭が、アヒルとかガチョウとかの家禽類のそれであるのに対して（②）、虎尾頭端部分の鳥頭が鳳頭形である（①）ところが大きな違いであるところを考えると、鳥崇拝とはいってもその鳥神がアヒル形ガチョウ形をとるものと鳳形をとるものがあつた可能性を想定すべきなのであろう。アヒル形ガチョウ形の鳥神となると、曾侯乙墓出土の例の鴛鴦形漆盒などがおのずから浮かんできて、考察の対象にしたい誘惑にかられるであろうが、ここではその対象からはずしたいと思う。理由は単純であつて、臥虎の尾頭が鳳頭になっているという、今一つの奇妙きわまりない意匠



の組み合わせを先に問題にしてみたい誘惑に抗しがたいからに他ならない。

楚文化器物にみられるこのような鳥虎動物意匠の代表例をあげるとすれば、それは虎座鳥架鼓の鳥頭と虎座であることはいうまでもなく、それに虎座飛鳥ももちろんこれと同等の資料意味をもつものとして扱うことができよう。

虎座鳥架鼓は、今までのところそのほとんどが江陵を中心とする荊州地区の戦国楚墓から出土している（図7）。北は河南信陽長台関1・2号墓、南は湖南湘郷牛形山1号墓などから、また最近では棗陽九連墩2号墓からも出土しているが、それら荊州地区以外からの出土例はまだまだ少数であり、楚国の近畿地区である荊州地区に出土が集中しているというこの一事だけをとり、楚文化の独有器にして指標器であると言えるのである。襄樊地区での出土については、今までのところほとんど報告が無いように思うが、『襄樊考古十年』は保存状態のよい虎座鳥架鼓をわずか一件ではあるが取り上げている。襄樊市高新区余崗128号墓からの出土で、他地区出土のものと同様の彩色が施されており、その図柄はきわめて美しい（図8）。これ以外に出土しているのかどうか、陳千万先生にお聞きするのを忘れてしまったが、襄樊地区楚墓の発掘進展状況を考えれば、今後、新しい出土があることは確実であろう。

一方、虎座飛鳥のほうは、荊州地区への集中度が虎座鳥架鼓ほどではないように思うものの、戦国楚墓独自の出土品であり、やはり楚文化の特有器にして指標器としての性格もっていることはまちがいない。ただ襄樊地区楚墓の出土例は『考古十年』や『文物陳列』に紹介例がなく、いくつかの発掘報告から搜してみても、

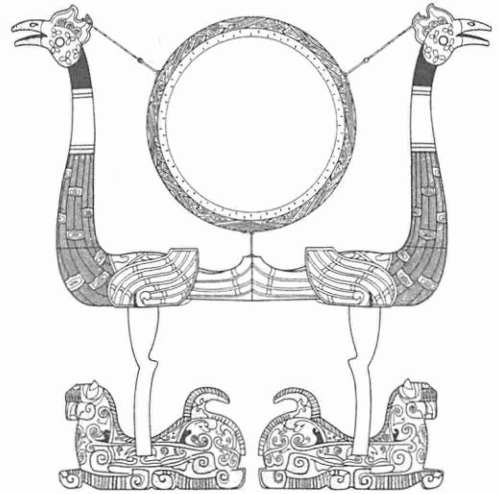


図7 湖北省文物考古研究所「江陵望山沙塚楚墓」  
図六二（文物出版社・1996年）。

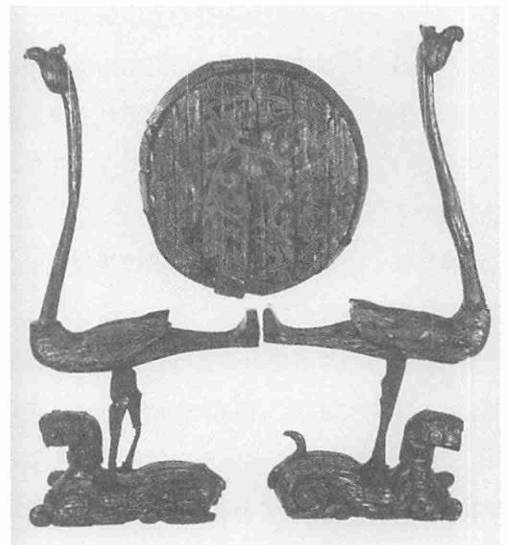


図8 襄樊市文物考古研究所「襄樊考古十年」73  
頁（湖北美術出版社・2006年）。

今のところ発見できないでいる。今後の新たな出土をまちたいと思う。

そこでさて、まず虎意匠の様相をしてみると、虎座鳥架鼓や虎座飛鳥の臥虎と戦国措銀馬佩飾の臥虎は、後者の虎がやや頭をもたげている点をのぞけば、四肢を折り曲げた伏せ方といい美しい紋様が採繪されていることといい、ほぼ同

一の姿態をとっている。次に鳥意匠の様相であるが、虎座鳥架鼓や虎座飛鳥の鳥頭にはさまざまな形状があり典型形を見出しがたいものの、いずれも美しい採絵の鳳頭であることに変わりはなく、戦国措銀馬佩飾の鳥頭もやはりその一種であることは容易に判断される。つまり、虎座鳥架鼓・虎座飛鳥の鳥表象・虎表象と戦国措銀馬佩飾の鳥表象・虎表象は、楚国の人々の意識において、同一の宗教的表象、いわば同一の神格として観念されていたと考えられるのである。

戦国措銀馬佩飾の鳥意匠と虎意匠の宗教的意味づけが、このように虎座鳥架鼓や虎座飛鳥の鳥意匠と虎意匠のそれと同じであるとする、鳥架と虎座の宗教的意味とその関係について提出された、例の故張正明氏の意見に対して、この襄樊博物館所蔵の新資料がどのように機能するかが当然問題となってくるであろう。張氏の研究は、鳥架と虎座の宗教的意味を取り上げた、おそらく最初の本格的な研究であり、その意見の骨子は次のようなものである（張正明）。

第一、鳥は楚族の崇拜物であり、虎は巴族の崇拜物である。したがって、楚国の人々にとって、鳥は自族神、虎は異族神である。

第二、鳥架が虎座の上に立っているのは、鳥が虎を踏みつけていること、つまり楚族が巴族を支配していることを示しており、そこでは虎神は劣敗神である。

第三、とすると、虎座鳥架鼓や虎座飛鳥は、おそらく楚国が巴国を制圧して以降に、楚国で作製されたものである。

四分の一世紀にわたって楚文化研究をリードし

た第一級の研究者の意見だけに、多くの反響をよんだことは確かであり、今なおこの意見を支持する者も少なくないほどである。

しかし、上が鳥、下が虎という設定にそのような支配・被支配、勝者・敗者、善神・悪神の関係を見ることがはたして正しいかどうか、張氏の意見に反論が登場するのはごく自然であって、たとえば邵学海氏の意見がそれであり、その骨子は次のようなものである（邵学海・谷口1）。

第一、楚族は支配集団ではあったが、もともと蛮夷的な集団であったため、被支配集団である他の蛮夷集団の文化・習俗を容認し、それを受容することに抵抗がなかった。

第二、したがって、楚国の人々は巴族の虎信仰を自族の信仰に準ずるものとして受け入れ、それを虎座として設定したのである。楚族と巴族の文化・習俗における関係は、共存・融合のそれであった。

両者の論点ともに傾聴すべきところが多いのであるが、虎座鳥架鼓や虎座飛鳥をいくらながめていても、両者の当否を判定することは困難であろう。正直のところ上が鳥、下が虎という設定は、みようによって、支配・被支配、共存・融合、どちらにも見えるからである。

論をすすめてここに至れば、襄樊博物館所蔵戦国措銀馬佩飾のこの問題における資料的価値が自ずから明らかになるというものではなからうか。虎尾の頭端がかつ鳥頭であるという設定からは、どう考えても、鳥が支配者・勝者・善神、虎が被支配者・敗者・悪神という関係は想定されようがない。そうではなく、鳥と虎はいわば

二身一体なのであるから、共存・融合という関係しか想定しようがないであろう。すなわち、この珍奇な資料は邵学海説の正しさを証拠づける、ほぼ決定的に近い資料なのであって、彩絵・器様などにおける芸術的価値をこえる資料価値が、ここに存在するのである。

なお、とすれば、九連墩2号墓から出土した虎座鳥架鼓の意匠組み合わせにも、あらためて注目しなければならないと思う(図9)。この虎座鳥架鼓には従来出土の虎座鳥架鼓にはない、きわめて興味深い設定が存在するのであって、それは、一對の鳥架の背中に一對の小さな虎が乗り、下方から太鼓を支えていることである。しかも、その一對の小虎の下部、鳥架の胸部外側に当たる部分には、鳥頭形の意匠が刻まれていて、みようによっては、小虎が鳥頭に乘っているようにも見える。その見方は少しがちすぎかも知れないが、それはともかくも鳥架と子虎のこの位置関係から、鳥が虎を制圧しているという意味を読み取ることは、どう考えても無理であろう。鳥と虎が協力して太鼓を保持していると見るのが自然であって、ここにも鳥と虎の共存と融合を読み取ることが可能であるように思うのである。

楚文化の要素に、その淵源として鳥神崇拝の意識が反映されていることはしばしば指摘されるところであるが、それとともに虎神崇拝もそのなかに加えなければならないことが、こうして明らかになった。考えてみれば、虎座をはじめとする楚文化器物の虎表象の意味を素直に解釈すれば、それは当然想定されるところであったはずなのであるが、虎座を崇拝対象ではなく、被支配者・敗者・悪神の表象とみる張正明氏のいわば古典的な意見があるために、そう言い切

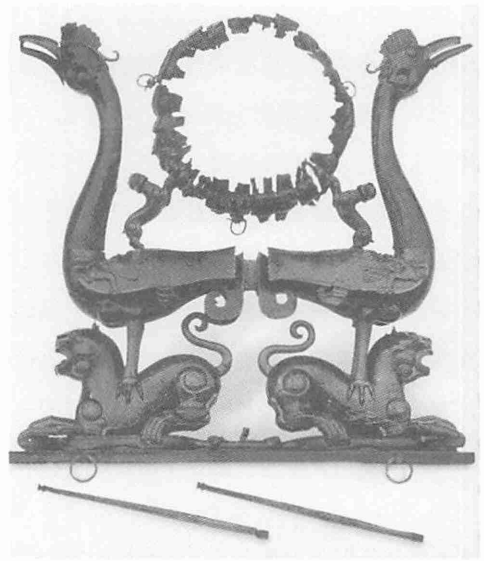


図9 湖北省博物館『九連墩・長江中游的楚国貴族大墓』114頁(文物出版社・2007年)。

れない状況が今日まで続いていたのであり、したがってこの珍品を一見して、懸案が一挙に解決されたが如き感情がわきあがるのを覚えたのは、無理からぬところであると思う。

ただ、こう考えてくると、一つの重要な問題が残されてしまったことに容易に気づかされる。それは、張正明氏にしろ邵学海氏にしろ、楚文化器物にみえる虎意匠は巴族の虎崇拝の表象であることを、何の疑いもなく大前提としているのであるが、それは正しいであろうかという問題である。実のところ、長江上中流域から虎モチーフをもった先秦文物が出土すると、必ずそれを巴族の虎崇拝に結びつけて解釈するのが通例である。巴族における虎崇拝の存在は疑うことのできない事実であるから、それはそれで理解できるのではあるが、しかし、巴国の領域内から出土する巴文化文物についてそう考えることは当然であるとしても、楚国の領域内から出土する楚文化文物についてそう考えなければならない必然性は無いのではなかろうか。

言い換えれば、楚文化文物にみえる虎モチーフは、巴族ではなく“楚族”の虎崇拜の表象であると考えて、何もおかしくはないと思うのである。楚文化文物のそれを何の疑いもなく巴族のそれと前提しまうからこそ、張正明氏のようなある種窮屈で奇抜な意見が出てきてしまっているのではなかろうか。

もちろんこれは、そもそも楚族とは何か、巴族とは何か、楚国領域内の人々の民族的構成はどうであったか、それぞれの民族的文化の由来はどこに求めるべきであるか、といった重要な懸案にかかわる大問題であって、そうそう簡単に解答が与えられるものではない。腹案らしきものを公表したことがあるものの（谷口2）、いまだはっきりした成案を提出しうる段階にはもちろんいたっておらず、成案の提出にはまだかなりの歳月を要するであろう。

### 戦国措金嵌玉鼈形銅帶鉤

楚国青銅器の特色といえば、いわゆる銅帶鉤（帯どめ）の独自さもその一つにあげることができるであろう。楚国領域内各地の多数の楚墓から出土しておおり、襄樊地区でも早くに山湾・蔡坡においてそれぞれ2件の出土をみている。

独自さというのは、もちろん紋飾や器形の独特さをいうのであるが、その独特さのなかでもっとも多く例にみられるものは、鉤の部分の側視形が鳥頭形をしていることであろう。その形のほとんどはアヒル形ガチョウ形であり、可動式接合金具框座部分の例のアヒル形ガチョウ形柱架ときわめてよく似ている。鳳形鳥神崇拜とは別の鳥神崇拜の表象が、そこには示されているのにちがいない。一方、虎崇拜表象と判定される動物意匠は、残念ながら目下のところ

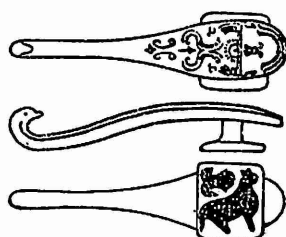


図10 湖北省荊州地区博物館「江陵雨台山楚墓」図六八（文物出版社・1984年）。

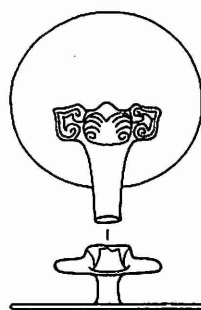


図11 湖南省常德市文物管理局等「沅水下游楚墓・中」図五六二（文物出版社・2010年）。

その例を探すことができない。ただ一つ、「図典」もとりあげている雨台山472号墓出土の銅帶鉤鈕扣部の面部に虎図象らしきものが見えるが、報告では馬状紋となっていて、はたして虎かどうかは判定しかねる（図10）。確かな事例の出土をまつしかないであろう。

なお、なかに鉤身上視形が象鼻の形をとっているものがあることは、注意をはらっておく必要がある。湖南省沅水下游常德市武陵区棉紡廠83号墓（夕陽坡2号墓・新編268号墓）出土のものがその例で、図のような形状である（図11）。上向きにあったはずの鼻先は欠けているが、これが象頭・象耳・象鼻であることは一目瞭然である。とすると、銅帶鉤に象意匠が設定されている以上、可動式接合金具に象意匠が設定されていてもそれほど不思議ではないことになり、例の蔡坡のそれらの框座柱架を象形とみ

た報告者の意見も、あながちまちがいでないことになるのかも知れない(図1)。それでもやはり鳥頭形とみるのが自然であると思うが、象形である可能性がゼロはないことを留意しておきたいと思う。

楚墓出土の銅帶鉤を以上のように簡単に概観して、さて紹介しようとする襄樊博物館所蔵の戦国措金嵌玉龍形銅帶鉤とは図のようなものである(図12)。この銅帶鉤は1976年に実施された宜城楚皇城遺址の調査の際に出土したもので、実はその調査報告に上視形と側視形が載せられている(楚皇城・図13)。襄樊博物館の『陳列』を開いてどこかで見た記憶がよみがえったのはそのためであり、王先福先生に指摘されるまで、それが楚皇城の報告であることに気づかなかったのは、まことにうかつなことである。

そこで、楚皇城の報告に記された解説と『陳列』の解説を読み比べてみると、この銅帶鉤の獸形の解釈に違いがあることがわかる。前者が龍頭と龍身からなる一体の龍であるとみなしているのに対して、後者は魚頭と龍身の合体したものであるとみなしているのである。ちなみにたとえば、首都博物館が所蔵する北京平谷劉家河出土の殷代晩期鳥柱魚紋盆には、盤内に三組の

魚紋と一体の龍紋が刻まれていて(図14)、魚と龍の親縁性がうかがわれ、そこから両者が合体する可能性も十分に想定されてくるのであるが、だからといって、『陳列』の解釈が正しいかどうか、これで決定づけられるわけではない。ここでは、全身であれ半身であれともかく龍意匠が設定されていることだけを確認して、両者の解釈の当否は保留にしておきたいと思う。

首都博物館所蔵の盆にしろこの襄樊博物館所蔵の銅帶鉤にしろ、そこに設定されている龍意匠が龍神崇拝の表象であることはまちがいない。楚國に龍神崇拝が存在した可能性が、ここに浮かんでくるのであるが、そうなるときわめて自然に例の龍靈伝説が想起されてくるはずである。

荆に龍靈という名の人物がいた。彼が死んだ際、死体はどこかへいってしまい、荆の人々が捜したにもかかわらず、見つけることができなかった。実は彼の死体は龍に姿を変えて長江をさかのぼり、蜀の地に泳ぎついて再生したのである。蜀王望帝(杜宇)は彼を登用して宰相とした。おりしも玉山に大雨が降って、堯の時代におこったような大洪水になったが、望帝はそれを治める

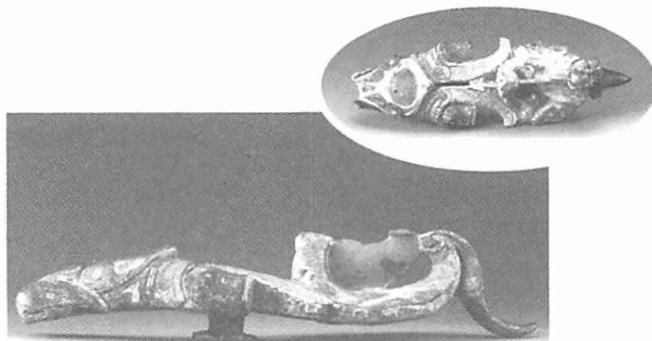


図12 張靖編『襄樊博物館文物陳列』40頁(湖北美術出版社・2010年)。

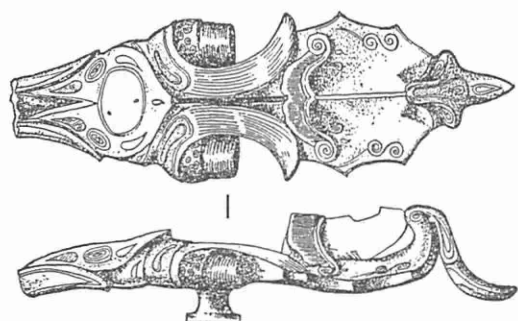


図13 楚皇城考古発掘隊「湖北宜昌楚皇城勘查簡報」(『考古』1980-2)。

ことができなかつた。そこで鼈霊に玉山を切り開いて水を流させたところ、洪水はおさまって人々は元通り大地に住むことができるようになった。鼈霊が治水に出かけていったのち、望帝はその妻と通じてしまったのであるが、鼈霊の功績をみるにつけ、自分の徳は薄くてとうてい鼈霊にかなわないことを自ら認め、鼈霊に国を委ねて王位を譲り、どこかへ行ってしまった。堯が舜に位を譲ったようにしたのである。こうして鼈霊は蜀王の位につき、開明と号した(『太平御覧』巻888所引『蜀王本紀』・意識)。

蜀の王朝が杜宇から開明王朝に代わった、そのいきさつを反映していると考えられるこの鼈霊伝説については、蜀の古代史を考察する上での数少ない資料であるだけに、数多い研究がある。それらの論点のすべてを列挙する余裕はないが、もっとも重要な論点は、鼈霊がはたしてほんとうに荆、つまり楚国の人か、そうではなく他の国の人かという点である。諸説のなかでは、鼈霊は重慶西部—湖北西部の巴族であり、楚国の人ではないという意見がもっとも優勢なようであるが、ただそうすると、なぜ巴族の人を“荆人”と記しているのか、説明がつきにくくなってしまふ。今のところ未解決としておくしかないのが実情であろう(谷口3)。

こういった未解決の懸案を除いていくと、この伝説から確実に読み取ることのできることは、次の三点につきることになる。

- 第一、杜宇に代わって蜀に王朝を建てた開明一族は、蜀地土着の一族ではなく、長江中流域から長江を上って西上してきた、外来の種族であった。
- 第二、開明一族は、治水工事に長けた一族



図14 中国青銅器全集編輯委員会『中国青銅器全集第4巻・商(四)』一七六(文物出版社・1998年)。

であったと思われる。

第三、開明一族の崇拜神は、鼈霊という名の通り、鼈形神であった。

第四、したがって、鼈神の主要な神格は治水神のそれであったと思われる。

この鼈霊伝説の第三・第四の意味を援用するならば、襄樊地区博物館所蔵銅帶鉤の鼈意匠が、治水神としての鼈神の表象であることはまちがいない。この銅帶鉤は楚国の領域内から出土した、まぎれもない楚文化文物なのであるから、それはまた、鼈神を崇拜神とする治水工事に長じたそのような集団が楚国に存在していたことをも示しているはずである。

この点、この銅帶鉤が楚皇城遺址から出土したという事実は、見逃してはならないであろう。楚皇城遺址とは、春秋戦国時代の楚国の都城郢都の重要な候補地であり（石泉）、よしんば郢都の遺構でないとしても、楚国の主要な拠点都市の遺址であることだけは認めねばならない。そこは、襄樊に優るとも劣らない陸路・水路の要衝であり、襄宜平原の南部を擁する豊かな生産基地でもあった。そして、交通の要衝にして平原を抱えているだけにまた、洪水と干ばつの危険に常に脅かされる地域でもあった。具体的にいうならば、襄樊市区から漢水を下ることおよそ40キロメートル、西から蛮河が漢水に流入するあたり、ことにその蛮河と漢水にはさまれた一帯は、古来洪水と渇水が繰り返された地域であり、そのことは漢水・蛮河の河道の変遷や、長渠・木渠・臭陂などの修築と整備といった事情に十分に示されている（水利史）。楚国の時代にももちろんそうであったはずであり、取水・治水の両面において、楚国の重要な治水地域となっていたであろう。したがって、ここ

から治水神である鼈神を表象した銅帶鉤が出土したのは偶然ではないかも知れないのである。

ちなみに先秦時期における蜀地域の治水工事の様相を考古資料によって復原した王毅氏は、鼈霊が楚の人であったかどうかはともかくとして、開明一族の治水技術は、楚国のその影響を強く受けていると推測している（王毅）。確かに、楚国では淮水水系の期思陂修築をはじめとする大治水工事が各地で実施されたことが知られており、その治水技術は、当時そうとう高い水準にあったことが想定される。その治水技術が、長江の上流蜀地域に伝来した可能性は、決して低くはないであろう。

以上のように楚国における鼈神崇拜と治水職能集団の存在を推測させるだけでも、この銅帶鉤の資料的価値は高いのであるが、これを紹介しようと思いついた第一の理由は、実は今一つの点にあることをここで白状しなければならない。その点とは、この鼈意匠が、楚王称謂の意味を考察した孫華氏の意見に、強くかかわると思われることである。

楚国の君長である楚王は、周知のように通例“熊”という称謂をもっている。この熊が何を意味しているかは、異論紛々の状況なのであるが、孫氏は、楚族の神話的始祖を考察するなかで、『爾雅』「積魚」の“鼈の三足なるを能といい、亀の三足なるを賁という”という記事をはじめとするいくつかの資料を引用して、熊（能）とは“三足鼈”であると主張しているのである。そして、三足鼈は崇伯鯀が姿を変えたといった形状であり、つまり楚族の神話的始祖は鯀であって、したがって、楚族の故郷は鯀の居住していた高山あたりであったとみるのが、孫氏学説の主旨に他ならない（孫華）。鯀と三足鼈を同一



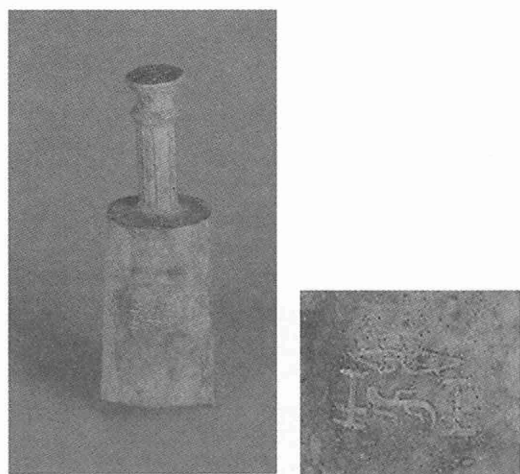


図15 中国音楽文物大系総編輯部『中国音楽文物大系・四川卷』59頁（大象出版社・1996年）。

神格の異形体とみてよいかどうか、にわかには支持しかねるところもあるが、楚族の祖先神が鼈の形状をもち、その名称が楚王に付せられる称謂となっているという指摘はきわめて重要である。もし孫氏の意見が正しいとすると、『山海経』「中山経」などによるかぎり、この三足鼈の故郷は現在の河南省西南部あたりであると考えられるのであるから、この意見は、楚族の起源地を漢水の支流丹江流域にあてる、近年にわかには支持者を増やしつつある学説にとって、さらに有力な論拠となりうるのである（谷口4）。

ただ、孫氏の意見に従いたいとは思うものの、なにせ資料といえは、孫氏が引用しているものにほとんど限られ、傍証でもよいかから何か他の資料をとらいつつも、重慶東方涪陵小田溪巴墓出土の青銅鉦の動物図案をあげるのが、せいぜいのところであった（図15・谷口4）。しかも、この図にみえる奇妙な動物は、三足ではあるが鼈にしては身体が細すぎるし、楚国の領域からそうとうに離れた、それも巴墓からの出土品で

あり、楚国に鼈崇拜が存在したことの例証とするには、やはりかなりの不安定さがつきまとうのはやむをえないであろう。そのような状況のなかで、鼈形銅帶鉤の鮮明なカラー写真を目にしたのであるから、内心喝采を叫んだのも、許されてよいと思う。銅帶鉤の鼈形は三足ではないけれども、なんといっても楚国の中心的な城市の一つであった楚皇城遺址から出土したのであり、上述にしたように、楚国に鼈崇拜が存在したことの動かぬ証拠なのである。同じ鼈である以上、ここに示されている鼈崇拜が、孫氏という三足鼈崇拜と、その宗教的意識において共通なものをもつ可能性はきわめて高いであろう。

思えば、楚皇城遺址調査報告の内容を記憶していれば、孫氏の意見を支持する際に、当然この銅帶鉤を持ち出すことができたはずなのであるが、もちろんそのころには孫氏の意見はまだ提出されておらず、しかも四分の一世紀以上という年月が記憶をあいまいにしていたのである。もし今回の襄樊博物館訪問がなかったならば、気づくのはより遅れたことであろう。指教を頂戴した王先福先生に、あらためて御礼申しあげねばならない。

楚文化の要素に、その淵源として鼈神崇拜の意識が反映されていることがこうして明らかになり、しかもその鼈崇拜の由来をたどっていくと、どうやら楚族の起源地である河南省西南地区の三足鼈崇拜にいきつく強い可能性が生じてきた。襄樊博物館所蔵の戦国措金嵌玉鼈形銅帶鉤はそのことを考えさせる、貴重な資料なのである。もし、この可能性を追求し続けると、楚王は鼈神王であったという、きわめて興味深い想定が浮かびあがってくるかも知れない。



それにしても、隨意匠をもつ器物はあまりにも少ない。今後の出土を切に期待したいし、もしすでに関連資料があれば、ぜひともご教示願いたいと思う。

## おわりに—楚文化文物にみられる虎意匠と龍意匠—

楚文化の文物にみえる動物意匠といえば、鳥・龍・虎・蛇・鹿で大半をしめており、その他の動物意匠はごく少数である。これらの動物意匠は、もちろん単なる愛玩や嗜好の表象ではなく、一種の動物神崇拜の表象であるとみるのが自然であろう。

では、それらの動物崇拜神の序列はどうであったかといえ、もちろんはっきりしたことはわからない。しばしばいわれるように鳥神崇拜がもっとも盛行したらしいのであるが、では

二番目は何で三番目は何かとなると、推測すら不可能である。というより、よしんば序列があったとしても、それは相対的なものであり、楚国の人々は何の動物神に対しても、その宗教的能力を信じて疑わなかったとみるべきであろう。

ところで、より大きな宗教的能力を発揮すべく、これらの動物神が二つ以上組み合わせられている例も数多くみることができるが、その組み合わせ方には二通りがあるようである。一つは、それぞれの動物神のある部分を切り取って、それらを組み合わせ、存在を想像することすら不可能な奇怪な形状の獣形を創造する方法で、浙川徐家嶺9号墓出土の例の青銅神獣がその代表例である。報告者によれば、この青銅獣は龍の頭、虎の身体、亀の足からなり、器体には龍・鳥・虎・雲・渦巻きの図案がはめ込まれているという(図16)。襄樊博物館所蔵の戦国措銀馬

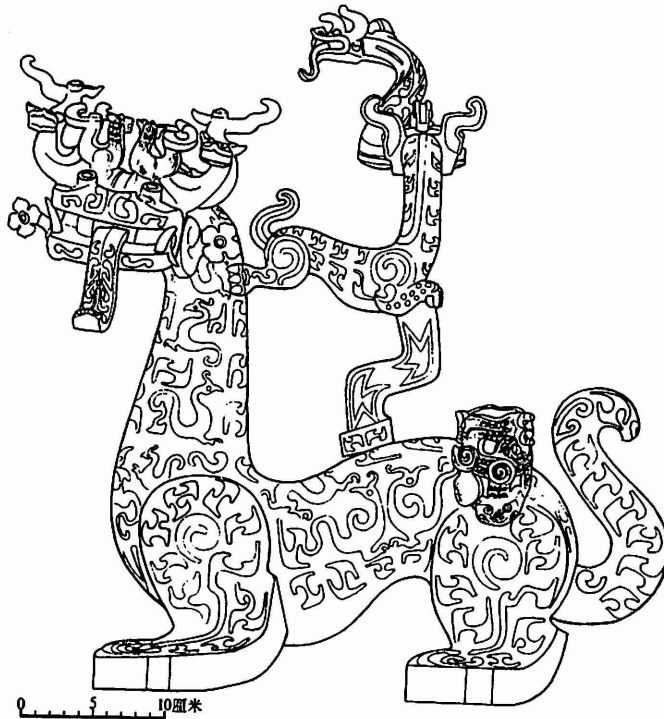


図16 河南省文物考古研究所等「浙川和尚嶺与徐家嶺楚墓」図一八二(大象出版社・2004年)。

佩飾の虎身と鳥頭の組み合わせもこの一例とすることができるであろう。もう一つは、それぞれの動物神の全身をそのままにして組み合わせたもので、虎座鳥架鼓や虎座飛鳥がもちろんその例である。

こういった組み合わせが、互いの宗教的能力は決して排斥しあうものではなく、合体して相乗的な能力を発揮するものだという意識に基づくことは、容易に想像できるが、この意識に関連して、注目すべき青銅器図案が存在する。実は楚文化の青銅器ではなく、巴文化の青銅器なのであるが、次のようなものである（図15・17・18・19）。図15は先にも引いた涪陵小田溪巴墓出土の青銅鉦銜部図案、図17は広漢出土と伝えられる四川省博物館所蔵の青銅鉦銜部図案、図18は成都市三洞橋出土の青銅勺底部図案、図19は万県出土と伝えられる四川大学博物館所蔵の青銅虎鈕鐎于盤部図案であり、四器はいずれも巴文化器物である。図15と図17をみれば一見してわかるように、15の図案の中心が無頭三足の動物であるのに対して、17の図案のそれが虎となっており、また図18と図19も一見してわかるように、18の図案の中心が亀鼈形動物であるのに対して、19のそれが虎となっている。これはどういうことなのであろうか。にわかには判断しかねるものの、虎神がある場合には無頭三足動物神に、ある場合には亀鼈神に姿を変えうるといふ、一種の“融即”の意識が存在したことを示しているのではなからうか。そうでなければ、同じ巴文化青銅器のよく似た図案構成においてこういう現象が起きていることが、説明しにくいであろう（谷口2・3・4）。

このように考えてくると、楚國に虎崇拜と鼈

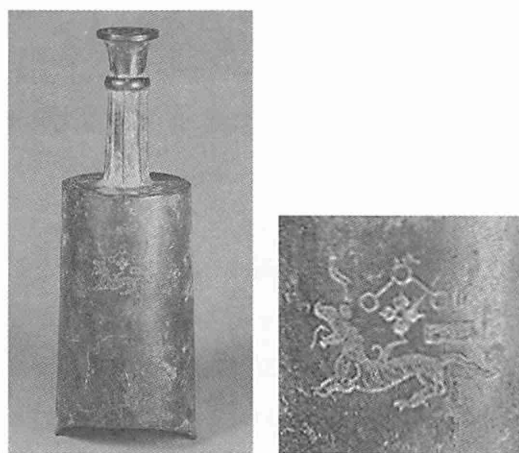


図17 中国音楽文物大系総編輯部『中国音楽文物大系・四川卷』58頁（大象出版社・1996年）。

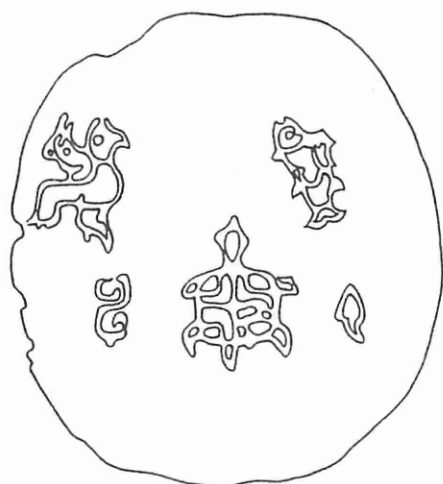


図18 呉怡「記成都市出土的幾件彫有圖騰紋飾的青銅器」（『成都文物』1986-3）。



図19 李純一「中国上古出土樂器綜論」図二一八（文物出版社・1998年）。

崇拝が存在したことは確かなのであるから、虎神と鼈神が二つの方法で組み合わせられたり、虎神と鼈神が互いに融即しあうといった情況が当然想定されてくる。そのことを示すような楚文化文物は、残念ながら未発見なのであるが、もし徐家嶺9号墓出土青銅神獣の足が亀足でなく鼈足であるとすれば、その例証の第一号となるかも知れない。もっとも、亀足なのか鼈足なのか、あるいはそれ以外の足であるのか、実のところ判定しようがないのであるが。

### 引用文献一覧（引用順）

- 張正明：張正明・滕壬生・張勝琳「鳳崗龍虎図象考釈」（『江漢考古』1984-1）。
- 邵学海：邵学海「虎座飛鳥是楚巫躡与巴巫躡的重祖」（『江漢考古』1997-2）。

邵学海「臥虎与飛鳥—巴楚文化融合的象徴」（彭万廷・屈定富主編『巴楚文化研究』中国三峡出版社・1997年）。

- 谷口1：谷口満「虎座鳥架鼓の彼方—戦国楚文化の淵源一」（『東北学院大学論集：歴史学・地理学』第32号）。
- 谷口2：谷口満「戦国楚文化の淵源—楚文化・巴文化同源説？」（早稲田大学長江流域文化研究所編『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』雄山閣・2006年）。
- 楚皇城：楚皇城考古發掘隊「湖北宜城楚皇城勘查簡報」（『考古』1980-2）。
- 谷口3：谷口満「鼈靈伝説の背景—長江上中流域における巴系民族の動向一」（『東北大学東洋史論集』十輯）。
- 石泉：石泉「古代荆楚地理新探」（武漢大学出版社・1988年）。
- 水利史：長江流域規画辦公室「長江水利史略」（水利電力出版社・1979年）。
- 王毅：王毅「从考古發現看川西平原治水的起源与發展」（成都文博考古叢書『華西考古研究（一）』）。
- 谷口4：谷口満「三足鼈の故郷—談談丹陽的地望」（武漢大学歴史地理研究所編『石泉先生九十誕辰紀念文集』湖北人民出版社・2007年）。